

【総合的な学習の時間】 第10回授業 指導案

芝浦工業大学柏中学高等学校 探究科

1. 単元名 仮説について

2. 本時の概要

本時は、2026年度中学2年生の「総合的な学習の時間」における第10回「仮説について」の授業である。

中学2年生の探究活動では、社会課題の解決に向けたポスター作成と外部コンクールへの提出を目指している。現在は、リサーチクエスション(RQ)や仮説の設定、検証方法の立案といった探究の「計画部分」を固めるフェーズにあり、9月の報告会に向けた見通しを立てる重要な段階である。

この活動において特に重視しているのは、「学びのサイクルの循環」と「論理的な仮説構築」の二つである。日々の学びを「LIFEログ」として記録し、客観的に自分を見つめ直すことで自律的な学習姿勢を養うとともに、収集した事実やデータに基づいた精度の高い仮説を立てる力は、探究の信頼性を高める上で不可欠な要素である。

第10回となる本時では、まず「LIFEログ」のループリック(レベル1～3)を意識した振り返りを行い、「今日の振り返りが、明日の自分をつくる」という意識を醸成する。続いて、RQに対する「予想される答え」としての仮説の定義を学び、大きな問いを具体的な調査可能な問いに分解する手法を習得する。さらに、チームで「探究計画書兼報告書」の作成を進め、11月の「探究Day」での発表を見据えた計画の具体化を図る。

これらの活動を通して、自身の成長をメタ認知し、根拠に基づいた論理的な探究プロセスを主体的に構築する意欲を高めるため、本時を設定した。

3. 本時の目標

- 質の高いリフレクションによる自己変容の促進: LIFEログのループリック(レベル3:変化に気づき、次につなげる)を意識して自身の学びを客観的に記録することで、日々の経験を「成長につながる振り返り」へと昇華させ、主体的に学習をコントロールできる。
- 論理的な仮説の設定と検証方法の立案: リサーチクエスションに対する「仮説」の定義を理解し、収集した事実やデータに基づいた理由を添えて仮説を立てるとともに、それらを検証するために必要な事実・データや論拠を論理的に導き出すことができる。
- 協働的な探究計画の構築と発信への意欲: 「探究計画書兼報告書」の作成を通じて、チームで協力しながら探究の背景から方法までを体系化し、11月の「探究Day」や外部コンクールへの挑戦に向けて意欲的に取り組もうとする態度を養う。

4. 本時の準備・使用教材・参考文献

- 教員用提示資料:
 - 授業スライド 第10回

- 使用教材(副教材):
 - 岡本尚也(2024)『ゼロから始める探究活動 課題研究メソッド ZERO』新興出版社啓林館
- 生徒用配布プリント:
 - スクールタクト課題『LIFEログ』(デジタル学習ツール上で配信)
 - 探究ノート(デジタルファイル配信)
 - 探究計画書兼報告書(デジタルファイル配信)
- 参考文献:
 - 松下佳代(2021)『対話型論証による学びのデザイン 学校で身につけてほしいたった一つのこと』勁草書房

5. 本時の展開(100分:50分×2コマ / 中間休憩10分)

時間	学習活動	指導上の留意点・教員の支援
【1時限目】		
1分	1. 本時の学習の流れを確認する。 (1)LIFEログ、(2)仮説の設定について、 の二段階の構成を把握する。	スライドを提示し、本時のタイムスケジュールを明示する。
4分	2. LIFEログの意義とルーブリックを理解する。 「学びのサイクル」を回す重要性和、自己評価の3段階基準(レベル1～3)を把握する。	「今日の振り返りが、明日の自分をつくる」というキャリア形成上の意義を強調する。
10分	3. LIFEログへの記入と自己評価を行う。 教科学習、探究、諸活動の1週間を振り返り、変化に気づく「レベル3」を意識してスクールタクトに入力する。	自身の言葉で書くことを促し、単なる記録に留まらない「成長につながる振り返り」を支援する。
35分	4. 各自の探究活動を推進する。 これまでに収集した情報を基に、個人の探究計画を具体化させる。	各担当教員は机間指導を行い、生徒が設定している方向性に対して適宜アドバイスを行う。
【2時限目】		

時間	学習活動	指導上の留意点・教員の支援
5分	5. 探究計画書の全体像と現在地を確認する。 9月の報告会に向けた「探究計画書兼報告書」の構成(1)～(7)を理解し、現在のフェーズを把握する。	スライドを用い、現在は探究の「計画部分(RQ、仮説、検証方法)」を固める重要な段階であることを伝える。
15分	6. 論理的な仮説の設定方法を習得する。 仮説を「RQに対する予想される答え」と定義し、事実やデータに基づいた理由を添える必要性を理解する。	医療の診察(実態把握と原因説明)や自動販売機の例を用い、仮説・データ・論拠の三者の関係を具体的に説明する。
30分	7. 仮説の構築と検証方法の立案を行う。 大きな問いを「小さな調査可能な問い」に分解し、どのような事実やデータがあれば仮説が立証されるかを検討する。	対象(どこ・だれ・何・いつ)を具体化して問いを深めるよう促す。 『RefNavi』でのカスタムタグ作成とチーム内共有を指示し、情報の組織的な管理を支援する。 11月の「探究Day」を見据え、意欲を高める声掛けを行う。